

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23593212

研究課題名(和文) 実習教育力の向上を旨とした大学教員と看護師の相互啓発教育モデルの開発

研究課題名(英文) Developing a Mutually Edifying Education Model for University Teachers and Nurses for Better Practice Education

研究代表者

高橋 博美 (TAKAHASHI, HIROMI)

共立女子大学・看護学部・教授

研究者番号：50154852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：大学教員と看護師は両者とも実習教育に熱意を持ち、真摯な態度で指導に臨んでいることが明らかになった。しかし、教員は看護師とコミュニケーションを深めたいと考えているが、関係作りに気を遣いすぎて消極的になる傾向があった。また、看護師の学生に対するケアリング・マインドが指導に影響していることが推察された。実習における教育力の向上には、両者のコミュニケーションの改善と教育観等を共有する方略が不可欠であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：It was revealed that university teachers and nurses are both devoted to practice education, and teaching with their sincere attitudes. However, we have observed that teachers tend to be passive as they try too hard to build good relationships to have better communications with nurses. On the other hand, it is speculated that the caring mind of nurses towards students is affecting their teaching. In order to improve practice education, it is indicated that measures to realize better communication and sharing the educational philosophy between teachers and nurses are essential.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護学実習教育 大学教員 看護師 相互啓発モデル

## 1. 研究開始当初の背景

看護学基礎教育における喫緊の課題のひとつである「実践能力を備えた質の高い看護職者の育成」には、実習教育の在り方が重要である。実習で実践的かつ効果的な学習を目ざすには大学教員と臨床看護師の協力が不可欠であり、そこには両者の看護に関連する鍵概念の共有と教育の方略・介入過程の検証などの実証研究と教育力向上の方策が必要である。しかし、大学と臨床施設という2つの異なる組織がどのように協働して教育成果をあげるかについて十分には探求されていない。

そこで、教育力と協働力の視点から実証研究を行い、相互啓発をコンセプトにした実習教育モデルの開発を目ざすことを考えた。

## 2. 研究の目的

A大学の教員とA大学病院の臨床看護師の看護学生への実習指導への関わりの実態と課題を明らかにする。その上で両者の臨床における教育力、ならびに協働力を向上させることを目ざした相互啓発の教育モデルを開発する。

## 3. 研究の方法

実習の実施に合わせてアクション・リサーチを行う。教員へのインタビュー、看護師への質問紙調査、会議ドキュメント類をおもな分析データとする。また、実習学生を対象に質問紙調査を行う。分析結果から課題を明らかにし、次期の実習指導上の改善策を検討・実践する。

なお、研究にあたり倫理的配慮として所属大学の倫理委員会の承認を受け、協力者には匿名性の保証、および調査内容の分析結果の教育への活用、研究報告、学会、専門誌等への発表以外の目的で用いないことを説明し承諾を得た。

### (1) 教員を対象にしたインタビュー

教育経験が豊富な教員3名へのインタビュー

成人看護学実習を担当している教員3名に実習指導の振り返りをテーマにインタビューを行った。内容は、ICレコーダーに録音し逐語録に起こし、それをテキストデータとし、Text Mining Studioを用いて分析した。

### 新任教員3名へのインタビュー

成人看護学実習を担当している新任教員3名に実習指導の振り返りをテーマに2年の間隔をあけて2度のインタビューを行った。内容は、ICレコーダーに録音し逐語録に起こし、それをテキストデータとし、Text Mining Studioを用いて分析した。

### (2) 看護師を対象にした質問紙調査

A大学病院で2009年度から2011年度に成人看護学実習指導を担当した看護師を対象に実習終了後毎に質問紙調査を行った。延べ回収数は90名であった。質問項目のうち、学生への要望、指導上での配慮や工夫についての自由記述を中心に分析した。記述数が多かった学生への要望と指導上の配慮や工夫についてText Mining Studioを用いて分析した。教員との連携や協力についての要望は、意味内容の類似性でカテゴリー化した。

### (3) 実習学生を対象にした質問紙調査

2011年度と2012年度の4年生を対象に、すべての実習が終了した前期末に質問紙調査を行った。質問は、指導を担当した看護師を想定したケアリングの組織風土に関する設問と実習の中で嫌な思いや傷ついた経験の有無とその内容についての自由記述である。自由記述部分はText Mining Studioを用いて分析した。

### (4) 実習教育の改善策の立案と実践

調査データの解析から明らかになった課題に対する改善策(問題への解決・対処)を立案し、実践・評価を行う。

実習教育モデル試案を作成する。

## 4. 研究成果

### (1) 教員を対象にしたインタビュー結果

教育経験が豊富な教員3名へのインタビュー結果

テキストの基本情報は、テキスト数463、ワード数3551であった。単語頻度解析では「学生」「指導者」「私」が、係り受け頻度解析では「気を使う」「コミュニケーション取る」「考え方違う」が高頻度に抽出された。その他の解析結果と総合すると、教員は指導にあたり、とくに学生・指導者・自分の3者関係に着目していること、指導者に気を遣いながら実習指導を行っていることがわかった。また、指導者とコミュニケーションを取るものの必要性を認識していながら多忙な現場でのタイミングの難しさや、指導に対する考え方が異なると思われる場面に遭遇することが重なると情報交換に消極的になる傾向があり、率直で十分なコミュニケーションに支障を感じていた。改善の努力は個々の教員レベルに留まっていた。教育経験が豊富な教員であっても、指導者との関係構築が実習指導上の大きな課題であることが判明した。学生に対しては、レベルに応じた成長を期待した指導を心がけていて、指導上の課題は抽出されなかった。

### 新任教員3名へのインタビュー結果

新任教員の実習指導における課題を検討

するために3年間の教育スタンスと協働を中心に解析データを検討した。1回目のインタビューの基本情報はテキスト数 638、ワード数 5157 であり、2回目はテキスト数 709、ワード数 5451 であった。係り受け頻度解析では1回目は順に「学生 いる」「指導者 調整」「ベッドサイド 行く」「記録 見る」であり、2回目は「学生 反応」「学生 変化」「自分 変わる」の順で高頻度抽出された。協働関係に注目した場合、1回目は「大事」「情報交換」「あいさつ」「調整」が、2回目では「つめる」「考え方」「立場」「臨床側」が抽出された。教育スタンスの変化として、より学生の反応を大切にしながら柔軟な関わりを重視する傾向が窺えた。協働関係では、実習環境調整の工夫や指導者との関係構築を中心とした対応から、指導者とのコミュニケーションを深め、指導の方向性を確認する対応へと変化していた。指導経験をリフレクティブに積むことが、指導上の具体的な解決策を見出すことに繋がっていることが示唆された。

## (2) 看護師を対象にした調査結果

指導過程で行っている配慮や工夫についての調査結果

テキストの基本情報は、テキスト数 180、ワード数 1402 であった。単語頻度解析では「学生」「患者」「指導」の順に高頻度抽出された。これらの単語と「心がける」について係り受け頻度を解析すると「学生 考える」「学生 関わる」「患者 関わる」「患者 入る」「指導 行う」「指導 心がける」「質問 心がける」「説明 心がける」が多く抽出された。その他の解析と総合した結果、実習指導上での配慮や工夫は、おもに実習環境と学生に向けて行われていた。学生が実習しやすい環境を作り、その上で実習目標が達成できるように学生の実践をサポートし、説明や質問で知識を確認したり、一緒に考えたりするという配慮を行っていた。また、学生の考えを引き出そうと意図的に関わり、学生をより理解して指導しようとしていた。さらに指導者自身が、患者に関わることを重要視し、看護の役割モデルとしての自分を意識して指導していることがわかった。

学生への要望についての調査結果

テキストの基本情報は、テキスト数 179、ワード数 1311 であった。単語頻度解析では「患者」「自己学習」「積極性」の順に高頻度抽出された。これらの単語の係り受け頻度を解析すると「患者 関わる」「患者 関わる + してほしい」「自己学習 深める + してほしい」「自己学習 共有 + できる」「積極性 持つ + してほしい」が多く抽出された。ことばネットワークと総合した結果、学生への要

望の特徴として【受け持ち患者の看護に対する専心】【実習学生としての望ましい振る舞い】の2つの特徴が見出された。【受け持ち患者の看護に対する専心】では、自己学習し準備を整えた上で実習に臨んでほしい、パソコンからの情報収集に時間を費やすのではなくベッドサイドで患者と関わってほしい、患者の看護問題を把握し、個別性に合った看護援助を見出してほしい、という要望が窺えた。【実習学生としての望ましい振る舞い】では、積極的態度、言葉使い、身だしなみ、有効な実習時間の使い方などを期待しており、臨床現場にあった態度やマナーを含めて学生らしい振る舞いを求めていることが窺えた。看護師は学生の指導にあたり、受け持ち患者との関わりや実践的な看護を重視し、臨地実習ならではの学びができるように考えて指導していることがわかった。

教員への要望についての調査結果

記述内容は、教員との密なコミュニケーションや情報交換、病棟に駐在していることへの安心感、学生のベッドサイドケアが重なった場合の協力に関してなど現状を肯定する意見が多かった。要望は少なかったが、その内容は【教員が学生に指導・調整した内容を伝えてほしい】【教員は自分の動き方を伝えてほしい】【教員は立場をわきまえた態度や言葉使いを学生に指導してほしい】【指導者が病棟管理者と教員の板挟みにならないようにしてほしい】の4つにカテゴリー化された。教員との指導の食い違いを防ぎ、事前準備や事後のフォローまで考慮した上で指導に当たりたいと考えていた。また、学生の教員に対する礼儀に欠けた態度や言葉使いを指摘・指導しない教員に疑問を感じ、教員の対応の甘さを危惧していた。【指導者が病棟管理者と教員の板挟みにならないようにしてほしい】は、1名からの要望だったが病棟との実習調整に深刻な課題があることが推測された。

## (3) 実習学生を対象にした調査結果

質問紙の回収率は、2011年度 65.8%、2012年度 99.0%であった。臨地実習で指導看護師(以下、指導者とする)に対し嫌な思いや傷ついた経験が「有る」と回答した学生は、2011年度が 50.6%、2012年度が 32.6%であった。「有る」の回答で経験の具体的内容を記述したテキストの基本情報は、それぞれテキスト数 45、49 であり、ワード数は 335、982 であった。関連性のあることばとして 2011年度は「わからない 怒る」「性格、考え 否定」「馬鹿 言い方」「冷たい、きつい 態度」などが抽出された。2012年度は、「患者、訪室 言う」「質問 答え + ない」などが抽出された。「強い 口調」は共通して抽出され

た。対応バブル分析では、2011年度は「言い方」に「冷たい」「強い」「きつい」「馬鹿」などが関連した。2012年度は「嫌」に「注意」「指導者」などが関連した。また、評判分析では、ネガティブな単語として「言い方」「顔」「口調」「対応」が高い頻度で抽出された。解析結果を総合すると、2011年度の学生は、自分に対し否定や拒否的な言動をする指導者の態度に、2012年度の学生は、指導者が学生の立場や気持ちを考慮しない態度に嫌な思いや傷ついた経験をしていた。学生は指導者の表情やことば・口調、態度に敏感に反応していることがわかった。指導者の学生に対するケアリング・マインドが学生に大きく影響していることが推察され、指導者には学生を理解しようとする姿勢や、学生が受け入れてもらえたと感じられる関わりが求められる。また、教員には、こうした学生の思いや気持ちを指導者に伝える役割も必要であることが示唆された。

#### (4) 実習教育の改善策の立案と実践

調査データの解析から明らかになった課題に対する改善策(問題への解決・対応)として以下のことを行った。

##### 実習指導者会議の充実のための実践

- ・実習開始前、終了後の年4回定期開催する
- ・従来の病棟管理者に加え、指導者の出席を依頼する
- ・会議資料として、学生の実習終了後の感想や意見等のデータを示す
- ・指導者に協力してもらった質問紙調査のデータを示し、内容を共有してもらう
- ・会議の中でできるだけ意見交換の時間を多く確保する

##### 教員の意識改善と行動

- ・病棟管理者や指導者との密なコミュニケーションと必要な情報交換への努力と工夫をする
- ・継続的に指導者から意見や提案をもらい、それに誠実に対応する
- ・指導や調整等の改善策について教員同士で共有する
- ・学生、教員、指導者が共通に活用できる「臨地実習ハンドブック」を作成する

##### 学生への働きかけ

- ・実習オリエンテーションで指導者からの学生への要望を伝え、指導者との関係を意識してもらう

##### 教員と病院看護師の合同研修会の開催

- ・2012年度：テーマ「学生の臨床実習場面における指導教育について 臨地における技術の適用と学生の主体的学習を促進するには」
- 外部講師による講演とグループディスカッション

- ・2013年度：テーマ「実習指導者と教員がうまく連携するためのヒントを得よう！」
- 外部講師による講演とグループディスカッション

病院の指導者講習会での講義担当

#### (5) 成果の総括

実習教育に関わっているA大学の教員とA大学病院の看護師は、それぞれにおいては教育に熱意を持ち、真摯な態度で教育に臨んでいることがわかった。しかし、教育力・協働力をより向上するには特に相互のコミュニケーションの在り方に課題があることが明らかになった。また、看護師によっては指導態度が学生への効果的な教育を妨げている一面があることから、指導者の学生に対するケアリング・マインドも課題であることがわかった。

これらの課題の改善のために前述の諸策を実践することで、相互の理解が進み、実習教育への意識と関わり方、協働は、良い方向に変化することができた。

実習教育における教育力と協働力は、いわば関与する人の実践知でありその集合知と考えることができる。実践知の獲得・継承には、良質の経験提供とそれを支える組織文化・風土、職場環境が重要であるといわれており、相互啓発を大きく推進するためには両者の組織特性や職場環境の中に潜む要因にまで目を向けたアクションが必要である。しかし、本研究では、組織の違い・事情が障壁となりそこまで迫ることができなかった。

相互啓発を旨とする教育モデルの構成要素は、以下の4点に整理できた。

##### 看護学教育および実習教育のミッションとビジョン、目標の明示と共有化

対話や教えあい、情報交換などの相互作用を活発にする環境と場の創設(教育・研修プログラムを含む)

学生の教育をともに成し遂げているという実践の体験共有

指導について省察することができ、自己の成長を感じられるようなサポートやフィードバックが得られる支援体制

教育モデルが、大学と病院の異なる組織の垣根を越えて、相補的な共通のキャリア育成戦略として、実践知の創造・共有・活用に繋がることを望まれる。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](0件)

[学会発表](計4件)

松永 明子、奥園 夏美、高橋 博美、  
新任教員の実習指導上の教育スタンスと協働における3年間の変化 テキストマイニングを用いて、第33回日本看護

科学学会学術集会、2013.12.7、大阪  
奥園 夏美、松永 明子、高橋 博美、  
臨地実習において学生が感じた嫌な思い  
や傷ついた経験 テキストマイニング  
を用いて、第33回日本看護科学学会学  
術集会、2013.12.7、大阪  
奥園 夏美、松永 明子、高橋 博美、  
成人看護学実習における臨地実習指導者  
の配慮や工夫の分析 テキストマイニ  
ングを用いて、第32回日本看護科学学  
会学術集会、2012.12.1、東京  
松永 明子、奥園 夏美、高橋 博美、  
成人看護学実習における臨地実習指導者  
の学生への要望 テキストマイニング  
を用いて、第32回日本看護科学学会学  
術集会、2012.12.1、東京

〔図書〕(0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 博美 (TAKAHASHI HIROMI)  
共立女子大学・看護学部・教授  
研究者番号：50154852

### (2) 研究分担者

奥園 夏美 (OKUZONO NATSUMI)  
福岡大学・医学部・助手  
研究者番号：50469384  
(平成23・24年度)

松永 明子 (MATSUNAGA AKIKO)  
福岡大学・医学部・助手  
研究者番号：20571318  
(平成23・24年度)